



# ピアノ演奏における評価の実態と今後の課題

## 1 はじめに

2017年、ピアノコンクールを描いた小説が直木賞を受賞した。恩田陸著の『蜜蜂と遠雷』(2016)である。この小説は、コンクールを舞台に4人のコンテスト(参加者)のピアノへの取り組み方、その生き方を描き

話題になった。ピアノを題材にした物語は多くあるが、『蜜蜂と遠雷』のように、ひとつのコンクールとその出場者に特化した小説は、これまでなかったように思われる。コンクールに取り組むピアノ奏者について著すということは、ピアノという楽器やその楽曲の特性をあますところなく描く必要がある。そして、「演奏を評価する」ということについて、深く切り込んでいかななくてはならない。

クラシックピアノのコンクールは、芸術性を評価されるスポーツ競技と似ているようで全く違う点がある。それは、選曲した楽曲を「楽譜通りに」弾かなくてはならない点である。例えば、フィギュアスケートやアーティストックスイミング<sup>①</sup>を考えてみる。それらの競技は、プログラムに技術的な要素を盛り込むことが必要だが、その構成は各選手(指導者)に任されている。しかし、クラシックピアノはそこに自由がなく、変更ができない。なぜならば、楽曲そのものがすでに、芸術性や技術性を極めて高く構成されているからである。クラシック音楽のコンクールは、スポーツのように技術点評価に関する国際基準がない。それはすでに楽曲のプログラムが完成されているからと言える。つまり、難易度が高い楽曲であればあるほど、それを巧みに弾きこなすことで、技術点が高くなる。その上で、作曲者の指示や意図を深く理解し、時代背景や楽器の特性、作曲者の生涯や考えを作品から探り、それを自分なりに表現する。その「自分なりの表現」が演奏者の個性であり、芸術性となる。しかし、この芸術性の評価はとても難しい。各審査員の考える楽曲のイメージに違いがあり、演奏者なりの表現を評価するにあたって、審査員の主観に左右されるといった問題も生じてしまう。

そこで本論説は、ピアノ演奏の評価について、世界的なショパン国際ピアノコンクールを例にあげながら、その難しさについて考える。さらに、日本国内のコンクール等の評価の実態について述べる。そして、本学の児童教育学科のような教員養成課程で学ぶ、学生たちの演奏についてその評価の在り方を考えたい。

## 2 ショパン国際ピアノコンクールの評価

### (1) DVD 審査の難しさ

ショパン国際ピアノコンクール、通称ショパン・コンクールは、世界中で極めて権威のあるピアノコンクールである。1927年の第1回から、2015年の第17回まで5年ごとに開催され、第1位受賞者だけ見ても、ポーリーニ、アルゲリッチ、ブーニンなど錚々たる世界的なピアニス

トが並ぶ。日本人では、第8回(1970)に第2位を受賞した内田光子のほか、故中村紘子、海老彰子、横山幸雄、小山実稚恵などが入賞している。

これほど権威あるピアノコンクールだが、その評価方法は、その都度変更があるという。ピアニストの青柳いづみこは、第17回(2015)のコンクールを現地でレポートし、著書『ショパン・コンクール』にその詳細を記している。

このコンクールは、まず書類・DVD審査がある。これに通過しないと予備予選にすら出場できないのだが、このDVD審査が問題だという。なぜならば、ホームビデオで撮影してDVD化した場合と、専門業者に依頼して専用ホール・専用機材で録音・撮影・編集した場合とでは、その質に雲泥の差が生じるからだ。実際に、第16回(2010)大会で、期待されていた応募者が書類・DVD審査に落選したことに対し審査員が抗議し、そのピアニストと同ランクの応募者を追加合格させたことがあったという。そして、その期待されていたピアニストは、最終的に第1位を受賞した。つまりDVD審査は、第1位を受賞するような演奏も、落選させてしまうことを示している。

近年のビデオやスマートフォン、レコーダーが、便利かつ優れていることについては周知の事実であろう。特に画質は飛躍的に向上している。音声も聞こえやすさに関しては、目を見張るほど(耳を疑うほど)改善されている。しかし、クラシック音楽演奏の再生に関しては、それが仇になってしまっている。オート機能という便利なシステムは、聞こえやすさを追求した結果、大きな音は小さく、小さな音は大きく再生してしまう。ピアノ演奏は、強弱も重要な芸術表現のひとつであるため、よい録音は、実際の音色をいかに再現できているかが肝となる。タッチを変えたことによって生じる音色の変化、強弱の表現、さらには呼吸や間などが音楽の重要な要素であるからだ。

### (2) 演奏会場および使用するピアノの違い

上の問題をふまえて、次回(第18回)はライブオーディションにする案も出ているという。しかし、この案も、そもそも会場が違うことによって、実力を公平に評

価することが難しいのではないかと指摘されている。例えば、ライブオーディションにした場合、各会場の質が同様のレベルであるかどうかの問題である。ホールの残響や、ピアノの質、各会場の録音技術等々の違いで結果に差が出ないようにすることはとても難しい。

ピアノは、他の楽器や声楽と比べて、楽器を持ち歩くことができないという特徴がある。演奏者全員が会場にある同じピアノを弾くという意味では公平であるが、自分の表現したい音やタッチを実現できないピアノもある。質の高いパフォーマンスをするためには、そこは極めて重要な点である。ショパン・コンクールは、メーカー4社からピアノを選ぶことができるが、それは世界的なコンクールだからである。たいていのコンクールでは、参加者全員が同じピアノを弾くことになる。これは公平なようで、実はそうではない。

ピアノは調律直後がもっともよい音程である。その後、大勢が弾けば弾くほど音程が狂ってくる。したがって、最初に弾く人と最後に弾く人では、大きな違いが出てしまう。一方、朝一番ではピアノが鳴りにくい、という問題もある。ある程度弾かれた後のピアノの方がよい音が鳴ることもある。さらに、個人レベルの繊細な問題もある。例えば、緊張すると手に汗をかくタイプの参加者が自分の前に弾いた場合、鍵盤を触ったらベトベトしていることがある。筆者の教え子は、コンクールに出場した際、鍵盤に血がついていたという。前の演奏者が、指をひっかけたりしたのかもしれないし、もともと皮がむけてしまっていたのかもしれない。いずれにせよ、そのような鍵盤を前にしたら、いつもの力が出せなくなる可能性はとても高い。

さらに、ピアノの椅子も重要である。ピアノ演奏者は、力の使い方や、求めるタッチを実現するために、椅子の高さにこだわる。そのため、舞台上で高さを調整する。座ってみて心地よくなければ再度立ち上がって調整し直さなければならない。なお、ショパン・コンクールでは、椅子も選択できる上、専用椅子を持参することもできるという。

### (3) 評価の高い演奏とは

ここで、冒頭に述べた「各審査員の考える楽曲のイ

メージに違いがあり、演奏者なりの表現を評価するにあたって、審査員の主観に左右されてしまう場合について考えてみたい。

前述のように、音楽演奏の評価は、技術面と芸術面を見る必要がある。作曲者の作った技術性および芸術性の高い楽曲を見事に演奏できれば評価は高くなる。そのため、一音一音すべて身体で覚え、正しく暗譜して演奏することが求められる。正しい演奏とは、作曲者の著した音高、リズム、拍子、調性、速度、強弱や楽語記号を理解した上で、それを表現することである。しかし、そこにも問題点がいくつかある。例えば、ショパン(1810-1849) 作品によく生じる問題は、「楽譜」が最新の研究により変化していることと、ポーランド独特のリズム感の感じ方や表現の違いなどがあげられる。

通常、出版されている楽譜には「原典版」と「解釈版」が存在する。「原典版」は、校訂上の付け足しや変更をしないで作曲家の意図を忠実に提示しようとした楽譜のことである。「解釈版」は、原典版に校訂者が自分なりの解釈や研究から演奏上の注意を書き入れたものである。ショパンは、この原典版に問題がある。初版が仏・独・英3ヶ国同時に出版された際、すでにそれぞれに違いがあったという。また、ショパン自身がレッスン中に複数の生徒の個性に合わせて自作曲の書き換えを行ったこと、死後の付加と変更が多く行われたという事情があり、結果的にどの楽譜が正しいショパンの解釈なのかかわからない。近年、ショパン・コンクールは、2010年に完成した「エキエル版」をナショナル・エディションとして推奨している。これは、今まで広く使われてきた「パデレフスキー版」と音やリズムに違いがあったりして、指導者も含め演奏家たちを現在においても悩ませている。

また、音楽演奏は実際に何を指して演奏すればよいかかわからない。コンクールでは、審査員の音楽性に合致していれば高得点になる。筆者自身の経験だが、学生時代に地方開催の小規模なコンクールに参加した。幸か不幸か参加者が少なく予選通過人数が数えるほどだったため、非常に恐縮だが入賞確実だろうと勝手に予測した。結果はどうだったかという、1位なしの2位であった。この結果について、審査員のひとりに聞いたところ、

筆者の点数は(母数の少ない中で)1番であったという。しかし、外国から招聘した審査委員長が「この演奏者(筆者)は、リズム感がよくない」と反対したという。当時、私が演奏した曲はショパンの「幻想ポロネーズ」であった。ポロネーズとは、ポーランドの伝統的な舞踏であり、ポーランド人以外でそのリズム感を体得することは難しいと言われている。

次元の違う話であるが、このリズム感問題は、ショパン・コンクールの審査でも起きている。青柳によると、ショパンのワルツやマズルカ等はポーランドの審査員たちと別国の審査員たちとで評価が違うという。

以上のように、個人の考える理想の演奏が各々違うという点は、音楽評価において非常に難しい問題である。さらに、作曲者が意図した「理想の演奏」の価値観も、時代によって変わる。ショパンは19世紀初頭の作曲家であるが、青柳はショパン演奏において何が「正統的」かということが、現在においても常に議論の対象になると述べている。

#### (4) 指導者と審査員

ショパン・コンクールの審査員は、コンテストを指導したことがある場合、審査の際に「S」(Student)申告をして、採点から外れる決まりがあるという。これは、自分の生徒に過剰によい点数をつけたりすることを防ぐためである。

この問題は、審査の機会や規模を問わず公平性を期すために配慮すべき点である。筆者も、さまざまな機会でも評価することがあるが、自分自身が指導した生徒だと、客観的な評価がつけられないことがある。そこまでの努力の過程や、上手く弾けていた時の情報等が頭に過ってしまう。

ショパン・コンクールだけでなく、それを防ぐための方策は、さまざまな方法で配慮されている。例えば、各審査員の点数から、最高点と最低点をカットして、平均点を算出する方法を用いるコンクールもある。今年で28回を迎える「日本クラシック音楽コンクール」の評価方法を見てみよう。これは、全国規模でありながら比較的自由度の高いコンクールである。評価の方法は、「審査員1人90点満点の1点刻みで採点し、最高点、最低点を

カットした平均を得点として(略)審査します。」とある。さらに、氏名や学校名などもふせて評価する。また、音楽大学などの実技試験では、ショパン・コンクールと同じように自分の指導している学生の指導教員はその審査に加わらないという決まりがあったりする。ほかにも、管弦楽団員のオーディションでは、国内外問わずブラインド審査を行うことが多い。

### 3 教員養成におけるピアノ実技の評価の在り方

これまで述べてきた音楽演奏の評価についての問題点は、高等教育の現場でも起きている。音楽系の大学だけではない。本学のような初等教育や幼児教育など、教員養成のための授業で演奏を評価する場合でも、同様の問題が生じる。教員採用試験の実技試験などでも同様である。これは、楽器初心者であろうが、経験者であろうが変わらない。ここでは、「演奏会場および使用するピアノの違い」、「評価の高い演奏とは」、「指導者と審査員」について、教員養成の演奏評価という視点から考えてみたい。

まず、演奏会場および使用するピアノの違いについてである。使用するピアノはもちろん選べない。どのようなピアノでも力が発揮できるように、電子ピアノからグランドピアノまで多くのピアノを体験させたい。さらに、「手汗問題」(と筆者は呼んでいる)は、深刻である。これまでレッスン中に、鍵盤にしたたり落ちる汗を何度も見たことがある。彼らが練習するピアノは、共用である。したがって、前の学生の汗がついた鍵盤を触ってしまい、指がすべって弾けないということがよくある。これは教員採用試験の現場でも当然起きているだろう。自分の演奏前にハンカチで鍵盤をふくと、気持ちを落ち着かせることにもつながるため、学生たちには今後もそれを指導していきたい。

次に教員養成において「評価の高い演奏」について考えてみたい。初等教育や幼児教育の演奏を評価する上で、音楽大学やコンクールと最も違う点は、芸術性は二の次になりがちで技術点に比重が置かれることである。



演奏専攻の学生は、ある程度の基礎ができていることが前提である。しかし、教員養成の場における演奏は、まず技術である。芸術性も評価したいが、そもそも普段からひとつの楽曲をじっくり勉強しその音楽表現を研究するような授業を行うことが実質できていない。レパートリーを増やし、教育内容に応じてピアノを弾く技術を身につけることを重要視する。そして、評価の観点が「芸術性」よりも、子どもの実態に沿った演奏技術を身につけたかどうかになってしまう。

最後に、「指導者と審査員」である。2(3)で述べたような、公正に評価するための工夫は、教員養成等のピアノ演奏を評価する場でも、配慮すべきである。筆者が、過去に指導した保育者養成校におけるピアノ実技試験でも、最高点と最低点をカットしたり、指導した学生の評価は行わなかったりなどの工夫がなされていた。現在、筆者の教職に関する授業「音楽」や「音楽実技」では、TA含む指導者が複数人いる場合、特に担当の学生を決めずに、全員で指導することになっている。そのことにより、学生の演奏上の課題やよく弾ける学生についての情報も共有できる。もちろん、担当を決めた方が、個に応じた指導ができるという利点もある。しかし、継続的な努力や授業内での成長を評価する場合には、この方法が妥当であると感じている。

## 4 おわりに

本論説は、ピアノ演奏の評価について、権威ある世界的なショパン・コンクールから、国内コンクール、オーディション、音楽大学の試験等、幅広くその実態について述べた。そして、児童教育学科のような教員養成のピアノ実技における学生たちの評価の在り方について考えた。

教員養成におけるピアノ実技の今後の課題は、音楽表現における「芸術性」を育む指導方法や授業内容の工夫である。前述のように、現在はその楽曲の持つ音楽性について、理解して表現する技術を育てるような指導ができていない。小学校で扱う「共通教材」、それに通じる唱歌や日本歌曲・合唱曲は、歴史的にも芸術的にも価値の

あるものである。ただ弾いて歌うだけでなく、その歴史・音楽性もしっかり学べるような授業を考えていきたい。

### 註

(1) 2017年までシンクロナイズドスイミングと呼ばれていた。

### 参考文献

- ・ 青柳いづみこ (2016) 『ショパン・コンクール』中公新書
- ・ 一般社団法人日本クラシック音楽協会「第28回日本クラシック音楽コンクール」<https://www.kurakon.net/>
- ・ 岡部玲子 (2015) 『ショパンの楽譜、どの版を選べばいいの?』ヤマハミュージックメディア
- ・ 恩田陸 (2016) 『蜜蜂と雷鳴』幻冬舎